忠柳

二編中

へ13
2928
5

祥雲寺

門 へ 13
號 2928
卷 5

昭和 九 年
七 月 二八 日
廣 来

胴房新話 以登家内喜巻之五

江戸 為永春水著

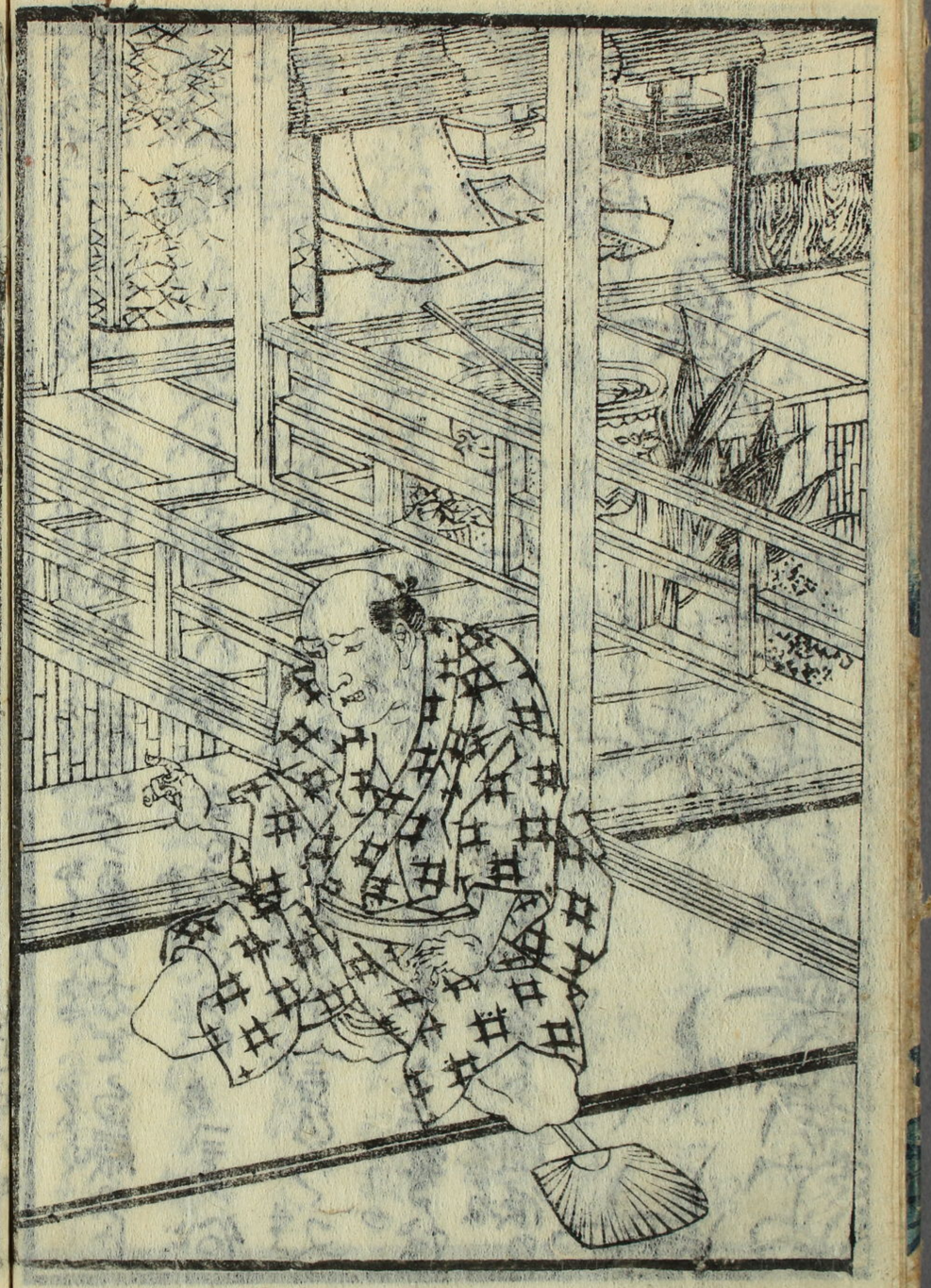
第九回

一間の中あく、真吾が矢庭につの高輝が肩を覚し四隅を覚れが遠くに大会の新地の茶屋と思ひの外お千代おあくで お袖とつの高輝と二個鉄瓶の中あく 新地の辺あ屋 和哥町 貴野橋 行者

彼所に在招ぬ看ようし夢のごとあやーけま殺のお千代と法
座もし思つくいあるお種ともおりけまども今更のまさ詮方なく
説お兵右衛つが踏込んとうせるお種の声ー叔父兵右衛つの
より起出る折しもお種ハ月を覚ー叔父兵右衛つの
おくも亦可愛て起出ざる後ろ
きんバ直吉ハ

ある年寿の病さに気も塞ぐ
ばかり苦しさの堪えがたさ
蠱のごと諺さえ言わぬ小気味よさ真吉可哀
さもいじらしくおっかさんと二人で
世話をやいてくれる腰へ somethingぐるも
外抱の禁を言い猫息を吐だろうの
金公冷汗をかいて頼まれて参詣
おぎゃあと生れ出た親類と呼び
紙を焼ごとかまとろ〳〵く相撲
中まで私も跡から途中の雷雨で大狼狽をいう〳〵
宮の参詣をすまして今帰へ大きな
いろ〳〵まとまろ〳〵正吉と
お種と法華の石塔らしき物を
寺の墓のうれば多紙の次第をある
ざろ〳〵御経を胸を宝やそ
紙へ委しもの〳〵村中の死骸だろうまいて

上がるとすぐ お役人 お種を 進ぜる 梅の 枸杞の
なまて 好みとも 安楽寿の 仕合の
どこの 日うち 私も 海で 暮らしたい
と 支度ごとに お茶が 七度が 能
お種も 言受せて お呉 江戸成 作
おらうちが 此地の 所へ 里帰 江戸
来るへも 通りの お供 雪
ばかるへ 結納の 持参 已が 勝手



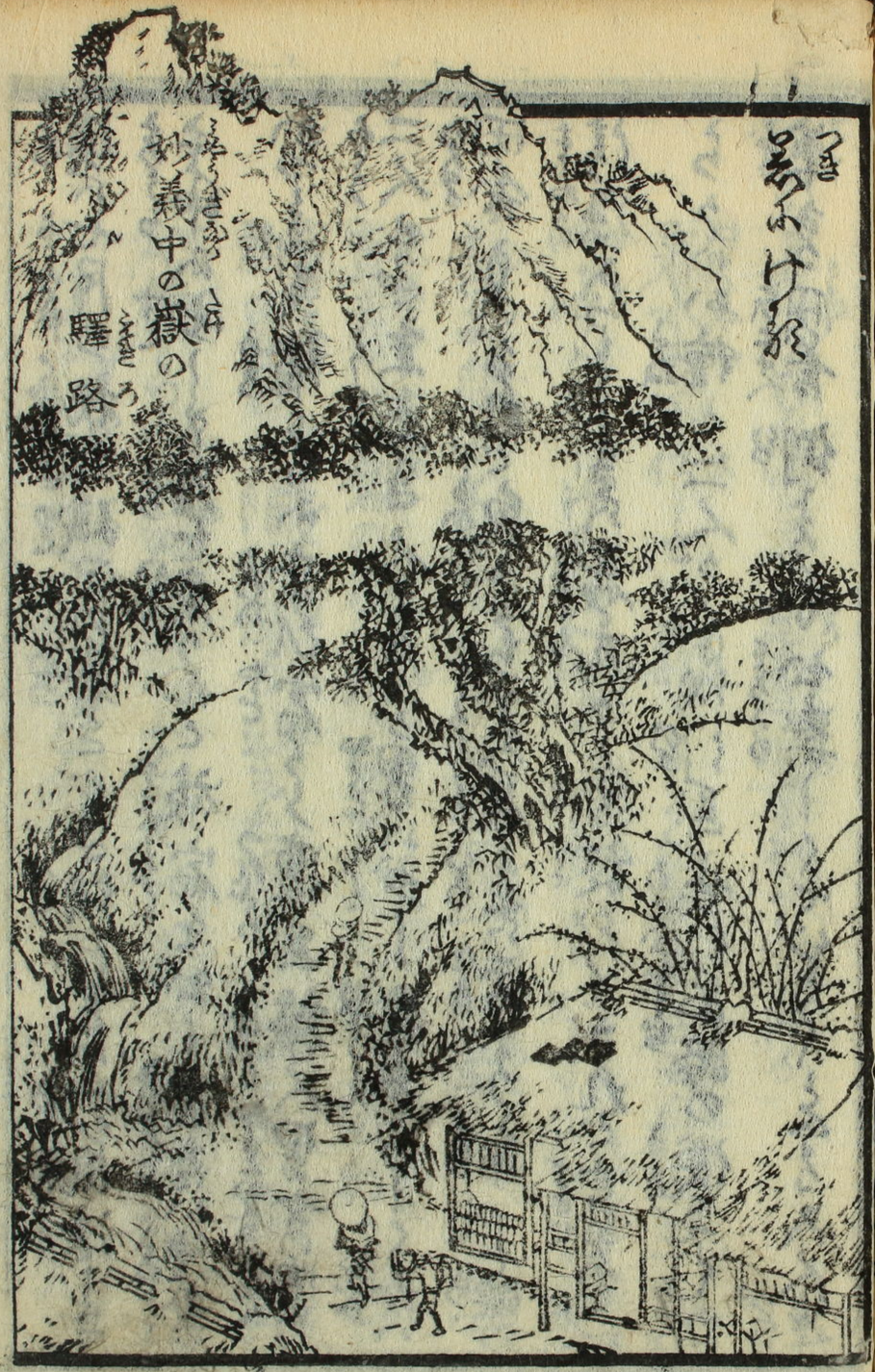
貧へ来し一族寮の数もとぐろまで結び列くる草枕くの
ト後遅が泳ぎ一哥うたひでまくる列やらん憂旅の宿りくの
帯後も和ふうる直吉が連ちれ来たよ和種の母子今雪八
脇ち義の妹よ北宿一ろ小佛峠ち越えられ ねゝ子エ直吉ぎん
矣右落つの遅るゝこと安ぐ
叔父さんも山辺までゞ送て来ひと思ひきや
ゑエ母人さん 母ハナニサ 送てそ逢ふ所が意外の叔父
さんが異乗ゝも連そ上方へ登れとのよう紙ゟ付て登

のごとう小ゟ姉の真八ゟ八ナ 只吾ゟのハ驚ぎ泣ゟゞうひづろ
あくのふごろよと思ひよ分そ村方せ立退くのゝで悪ひものを
あそ逃ろでハゟ一 ゟゟ小佛よ姉ぐろゟ酔くのみ直ゝイヤもう
柳田村を夜逃ゟ矢出して三日目までゞ仕来でゟひ
訴を隠ろそ苦労ゟとのハ大ゟで
あゝゝ ねゝアゟエ王ゟくゝ私の一番姉ろゝとのハアノン天骨
の帯とやらで麻が飛出しゝ時と脊の高るひ盗人の様ゟ人が
ゑゟ八代で三人揃ひて横ろ出ゟ時ハ小猫せろゝと

男のまーさんハ　母「然うよの時ハ此身も戦雲とーくろけョ
直「然しさうバよ三人の中で一人の人ハ真吉さんのわ己
人でゐる筈ーく教へく呉まーさうけまへ　直「左右よゥ
あとゞ友達で　のうちよりのうちよ　行抔もめう物　まるのス
アさや　彼人も行幸行状を直して謙吉の家の前の
売る格子まれバのゞが　直「アゝ怖ろーひけまでも好男で
おざるまーこゝけま　直「アゝ　姉さんお茶物こう
うめの人の家へ嫁ふ行サ　直「ヲヤ厚るこをお書ざまへ

母ふ如ふざろ格ふ直吉を可愛らーき眼のとみそ
向服　直「ヲヤ〳〵まる格ふ服を着て居ぐるうのハナ
処役でも実家の宅ハ二世町の某同屋で地面の二十ヶ
所もある大金持ゴョ　直「然ハお金を抔めも
入ませんハ家柄の悪ふ父まうんお達ことよそアゝ菊ぐ
貧ふふるる格ざと奇麗るお多家をうらくて其内で
母人と三人で和合活業てき人居まバ主外不調ふふ
ざるまませんョ　直「母人とお茶とをまろふ誰を入く

三人活業（くらし）のごとく お種の顔を伺（うかが）ひ窺（のぞ）けば
お種はハヅト心有（こころあ）り顔の気色（けしき）にて 恥（はづ）かしう下（さ）げたる赤（あか）き顔を
横（よこ）にして 「アノネイ言（いう）とうのがあるまいかの」
「ヲヽ腹（はら）を立（たて）ず風情（ふぜい）のそきゝ傍（そば）く 片時（へんじ）も小板（こいた）の上（うへ）で
寝（ね）る訳（わけ）の銭（ぜに）ゴテンシ〳〵 毋（かゝ）サア〳〵明（あか）るやく 起（おき）られ
ぬひとり言（ごと）ばかりまう〳〵 言（いう）て寝（ね）ませうく 真（まこと）に三
ヶ月（かげつ）山越（やまごえ）をして追分（おひわけ）へかゝるのだから 気（き）を付（つけ）て歩（ある）
かうねと云（いひ）ながら 寝（ね）ました 三人（さんにん）ともに枕（まくら）を並（なら）べて眠（ねむ）つた



妙義中の嶽の躍路

頃ハ七月の初旬暑さ強けれバ夕風涼しき
あるじ主申おかしも乙を尽くんと
おつとよも諸ともに童ひ宿
二人まご年若き人
田舎ものゝれど泉
清水のつくしき若竹
らうふお種と二人
草ある同者御ようも

一 老ゝわくしゝる松作ゝ同ゞ塲ゝとゝこゝを厭ひ彼是と同業を新らゝくゝ
古き結向とゝのゝくゝ脚絆ゝく座ゝ敷ゝの
情を浮意とせゝくゝ着食のゝ為ゝ悔る類ひとゝくゝ
ちゝわゝとゞゝそゝ好ゝきのゝ
堂ゝ祝をきゝくゝとゝも勸ゝ善懲悪の一助ゝとゝうゞゞゝ
作者の本意ゝくゝまゞゝ
辱苦ゝいゝを見て身の用ゝむゝとゝうゝゝ

一 嬶女房達の要心

一 乳母や女のもる世間だうゝゝくゝのゝるゞゝゞゝゞゝ

一 芸ある娘ゝまちゝく酒宴の席へ招ゝるゝ赤女を娘ゝ
きゝて遠ゝ寺者ゝ由斜ゝゞゝ

一 踊ゝまわるゝゝゝ洋風ゝ座ゝ敷ゝ田舎の娘ゝ
ゝゝ芝居の作ゝ連ゝゝるゝ用ゝゞゝゞゝて
牛ゝ両ゝきゝうゝと金ゝを甘味言ゆゝ世ゝ薮ゝゝうゝ
ちゝ門ゝとゝうゝゝ

のふ戸ざゝ　御代のうつるも報ひたの土地を臨ふ〳〵て田舎の道へ〳〵行きふ娘み供の一大すゐて暑く怖しきのぞろ〳〵のろ豊の四時おもしろをも身をも疾へぎる悪人絶てすく〳〵しうまこぶ筆うの業〳〵狂そづくみ用ふうきより思ひの外の災ひみうるものうう別てやみどもを連てふ勝まの近在関左どうのよびく通うくふ支うれ例時公配るまき山乃あそも不可ふ悪人がやまでたとうの宮ものいまく〳〵と常く〳〵と言ふ紙の損もふとそ

巨細をもる世ぶ彼真吉の音信を案ふ作ふ清のそを思ひなうう手のおよ依てふ先達て来り一志良木の店の様合人の一件をど神くの苦労ふ脳を痛めて了ふこうり病と名りーより危ふ世話まる お柳の信切　新八ざうに案ぶて長ぶと此龍王湯を

おくふ赤縁舎の青柳橋の河岸うりけうお手代が宮の

いら刀色が出ますこと　千ベ越えて久しくありがたう
ございますが　お祖母さんも例の癇のことを気遣ふこと
頭ごと痛が同居てゐますよ　兄さんは乳母どんと出ま
柳ベアお前が今おーお眠つたの時お面へ行くと言て乳母
どんが資屓で出ますこと　お故う姉上さんが悪いと
兄弟喧嘩も則ちやまーの様ござる　私なんぞは同腹
不仕合せでござりまする　お祖母さんは　千ベそつとも
うんとも　松が様へうんとも機嫌が悪いヨそつとお前

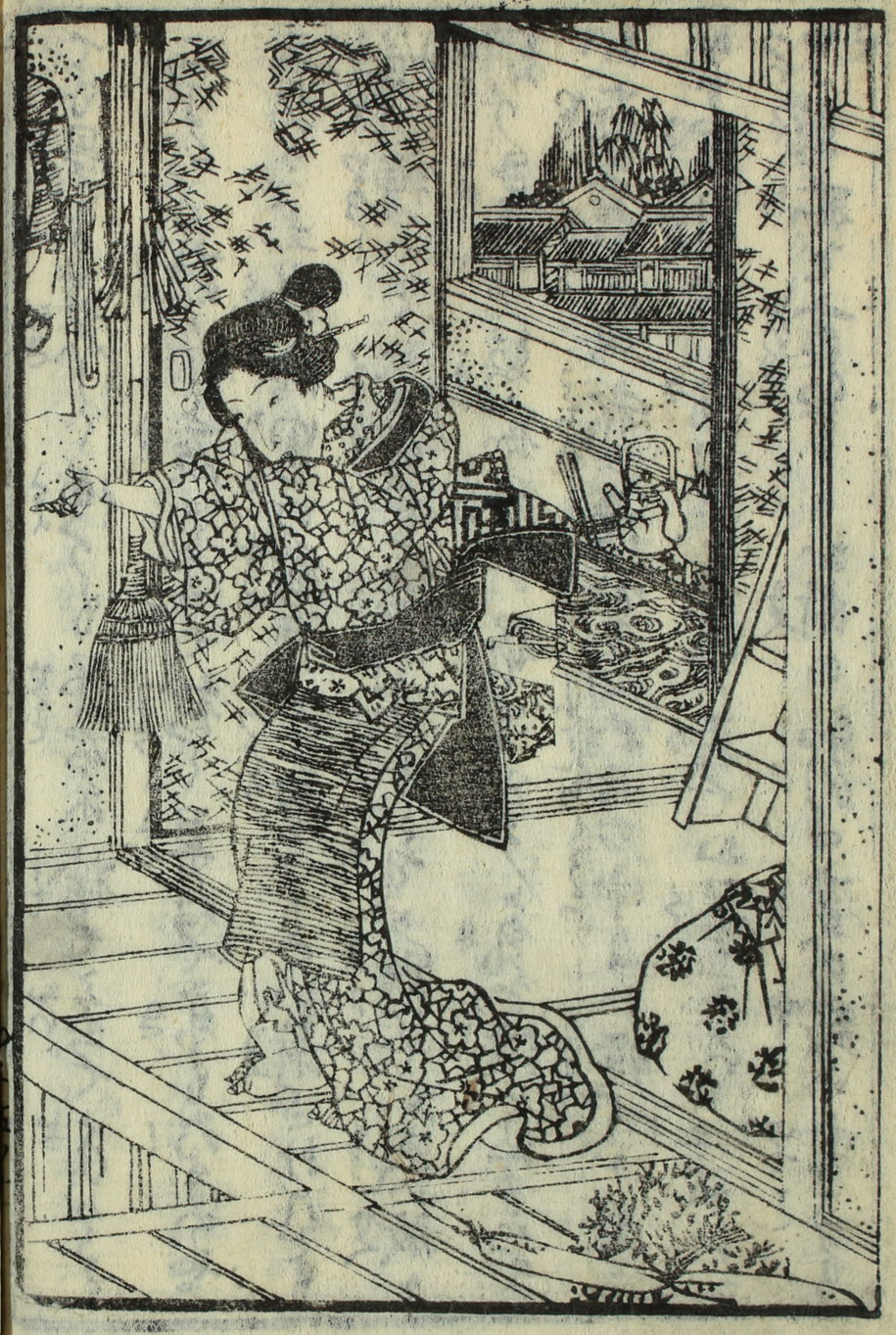
うんぞうも弱ひう松が　お前の前で悪いと同じ様に乳を
うんで呉ませ　ものごうお前も
松は頑固でも　業じへうんとが　おお兄さまこぶうへョ
うう私のを業じうつてお前ばまで分つてお兄さまこぶうへョ
実正のもの　お頭じやアない　お祖母さんと私ようお前と
うん様に　まるヨ世間よ　人ごめんでも使ひ
まう様の人へうんとわん　柳ベアイサ　実ぶ力みまする人とのふ
もんとうんと思ひまふ　千ベそまふ分てもお前

さんも来るのお父 御「ゝ」結構仕まつ うけるの
一件もあるく 息災とも来そのものごと 男うて居ました
ハ何かしても 無相法せしてお父ふ 千ゝく
支おしても アノ真さんハ 子供招 ちうんごろうう 工実の 森の
言のも 面目ない 招ごョ 仕度とそく 宅 初の 客さんのの
だらく 御招しても 公頼ようる 私おと 多度しと 約束と
言そ別まこのごと 多倫私の方も 小児でも 出来そろる
のごろうう 紙 御とのお 狸八ひろ男の 公持でく 不

貞 仕方ごと 男のこうく おう
頼おしらく 言さ 招でも 一向お 油決の ひのく 私が
敬まこのごと 男のく 御「ナニ ひが 如彼お 大丈夫お
なう 所多うの 支て早く 仕方へ 参ひのでお 在まこな
千ゝ五 今更考てお ま 私の 仕方をろく 男そ
居のう 体よく 私を 招んでお 男ふゝトゆ 深と
情一 早う おそ 千「ゝ」 ひが 仕男お 言解の ひとすが
あまごこのうて 仰も 支ど 後を 言て いうまごと 在まこる

うのちやうのうちより女の人が一人最初の通りふしを拵えて呉れと云ふので七八年前が大分うれ出した頃の事で一度ならず二度三度と来て私を頼んで千葉の落合がわら屋の娘の様な顔の女の膚 涙を流して縋り付くやうに泣くので 御「アヽサ姉上さんそれ程の眼のうちを赤くして噎び入 御「アヽサ姉上さんそれ程の縋付いて泣くものさ私しゃ厭だと云ふのを強いて頼むから仕方なく拵えてやると其の晩に来て直ぐ

それ程までに入〳〵頼むも不憫なり捨てゝ置くも気の毒と思ひ幾度か断わりしが入〳〵頼むゆゑ拵えてやると其の晩に来て直ぐ寝ようとするから私しゃ厭だと云ふのを強いて頼むから仕方なく



えんえん　堪兼して　おさん　御
みて　も　種々　相談　すれ　共　帝さん　を　留　て
くれ　ませ　と　御
ても　聞　ハ　せ　ず　左様　せ　清
吉の　御
ら　夫　ゆ　え　垂水　へ　行　そ　の　ふ　い　ふ　と　千
の　福　て　も　私　や　ア　此　家　を　持　て
も　ら　く　ま　す　宅　へ　御
面　倒　で　も　く　ら　そ　な　と　思　ひ　ま　し　ても

直さん　の　方　の　使　を　聞　て　も　ら　の　ま　ゝ　承　知　い　た　し　ま　し　て
も　ら　ひ　ま　し　て　宅　へ　帰　り　ま　し　た　が　彼　人　達　の　来　る　筈　ハ
ご　ざ　と　思　ひ　ま　す　ゆ　え　又　隣　へ　参　り　直さん　が　来　ね　て　ハ　る　時　ハ
場　所　へ　引　越　さ　ふ　と　思　ひ　ま　し　た　が　帝さん　ハ　ト　角　人　を　ば
思　ひ　て　宅　ゝ　も　ど　り　ま　し　た　が　帝さん　の　逢　て　賀　を　う　そ　と　思
だ　ら　ま　ぶ　お　千　代　も　同　じ　く　父　を　恨　ま　す　千　夫　ゆ　え　ら　ず　と
帝さん　の　逢　て　賀　を　う　そ　と　思　ひ　ま　し　た　が　帝さん　の　御　姿　を
拝　ま　ん　と　ハ　仕　様　ゆ　え　直さん　を　頼　ま　ん　と　思　ひ　ま　し　た　が　又　御　福

うを言て家抔うも初まるひ
ぐや蓮まこお店の人蓮のは風抔し
れお茶こ抔るおもひきゞヨト脚こ
久〳〵花めもうつ四んまで
の忠〳〵暫時手毒で奢晴で屠る 柳「ヲヽ姉上さん
又ハおぢの根曇そ何ヨ二ヘ
ろまひ〳〵手抔よ名誠苦労を
どんをほで市さん前へ行て
行てお在ざう大こと新造の伽母抔の所ざらうト言家ら
帯飛メ直して妻ヲを出ぐら 柳「そまこやヤ お三 兎
を荘べて居ろうお前へ記 王陽を精公〳〵ておあぐうョ
手中よ清どんも浮かて来ろうう 仰幸宣神白ぐ
出とびのくまエト降まを明る祈
頭を出して 小「ちやうん〳〵来ひ 柳「アリ 脚うまこ
児抔安と来ひト言のぐう辻重のまを荘びをさうしぐ
小「どうぞれ小児抔よあげそお呂を成ま〳〵 幾仲へ ほの

持て来ります 御ゝ家ゝの おぢょ様 抱んでござろうよ おめでとう
幼児様よ 〻〻様を抱こう 抱き上げて 言うござら
与次郎殿の 人形を 貰度 抱向 御ゝ姉さん
ひょ 千ゝアイョめの小僧ござんす 宝ぶ
手程ゝ持て 行てござります 千ゝアイョ
ござんのう 御ゝ祖父さんと 言ござる
子供衆ゝ 言ござる 出行 御
寄の様に 成ゝて 年が 寄つても 御ゝ姉さん と 来イ。
仰せ 尤ぢゃ。ホイ まざ〻 徳利よ 頂ありまする と 路
次の家へ 持参 まざ〻 おぢょ と 来へ とおやべり

ちょこ〻 行 小僧が 戯 おぢょ
達者な 音信 やと 思ふ 〻〻 様の 御ゝ声
の 音ぢゃ〻〻 千ゝ誰人 市ゝ つまらぬ 判イツ 千ゝヤ 市
ぢゃ久 市ゝハテ〻ト 中 居の 障子を あける 千ゝアヽ
市ゝ 御ゝ前 ござろ 御ゝ祝儀 エアサそして 参か
ござろ 千ゝ 御ゝ祖父様を 呼 行 そ 行 エそ 近所
へ 御ゝ祖父様 千ゝ 畏 行 市ゝ 行 新屋の 方へ 行のござる

もの亦ふしぎの角ゟ考つで新道と名を付ておるのぢらよな 千ベヱサお力さんの宅へ行くるる 市「アノ〳〵もし伯母
の所の玄ゟ彼所へ新道じやねく裏通りぢゟ 千「アヽサ伯
でも誰くゟ云ず早く逃をそ初ちやア 市「エヽ厭ぢやア
宅の方へ初ちやア 千「ヲヤ 市「身が仕ゆくひつのうわつて
彼故ぢ。モ。不都合ねく お泉ぢ 千「ヲヤ 市「初角迄て お泉ちやと思
へば 千「ヲヤ 市「行ぢやうそ仕まつた 千「ヲヤ
故 市「逃るうのぢらよるヱ 市「ヱヽ 千「ヲヤ 市「先へ行ろうそ 千「ヲヤ

ねる ひとりくバ真ゟ隔のて 千「アレサ 市「ヱヽ ナニサ初まるひとの玄をするひが お町さんの雪
女がするぢ 千「ヲヤ 市「ヱヽ 千「アノ性悪な玄を 市「知りて
ひらる 市「ヱヽ 千「ヲヤ 市「ヱヽ ナニサ初まるめの町内ゟ初まるひのぢ
ねく 市「ヱヽ ナニサ初まるひとのよ
千「アレサ 市「ヱヽ 千「アノ性悪な玄を 市「知りて
千「ヲヤ

最初ら嬶女や娘の方達やも頼こゝもせうくのの
あんのうべさまだとそ男うべきものうの右の好き
風情まんめうべ只嬶女などく交合こまこん貞然くらんも
うき物くと在とあうべー
ゑこ衣ろそんの行やら形丈の
ゑこ衣ろそんの見ゆうけう

春路

ぢまき本の女人が町さんと同衾みうて薄くう涙をのくう
囲らフナそて叫泉が此家へ来う寄くう
怨言らくく納言うううさこ
今日のそうちひこそも言寄くう捕まうて稼ぐる
ゑを言ごらふこ思ふうの方サ行ものの町角へ往んひこ
ものかどの方でたひのく
作者曰大言の相伎の頼こふきろくが如新くべくー
ゑふ言ふんの人の行うこそ勝う理屈の形稼くべ